

轉換した赤軍の防衛戦略

独ソ開戦 極秘の図上演習



集結したソ連のBA装甲車。独ソ開戦開始以前の1枚。

バルバロッサ作戦緒戦において、ドイツ軍の圧倒的攻勢の前になすすべもなく敗退するソ連軍—
そうした認識に再考を迫る事実が明らかとなった。赤軍の防衛戦略の大轉換にメスを入れる。

文=守屋 純

ソ連の対独戦略への誤解

一九四一年六月二十二日に始まるドイツの対ソ攻撃、すなわち「バルバロッサ」作戦は、緒戦の大成功にもかかわらず、わずか一か月で早くも頓挫し、十月からは新たに「台風」^{タイフーン}作戦として衣替えを余儀なくされ、それも十二月にはモスクワ前面でのソ連側の総反撃によって完全な失敗に終わった。

しかし時系列を逆にたどっていくと多くの謎につきあたる。そしてこれらの謎を追求していくと、今まで当たり前のように思われていた「バルバロッサ」作戦のイメージが、実は大きな錯覚あるいは一種の「だまし絵」を見ていたのではないかと、との疑問にたどりつく。

その謎とは、独軍がソ連領内奥深く進撃すればするほど、ソ連は新手の、しかも精銳の兵力を繰り出してきて、ついにはモスクワ前面で最強のシベリア部隊を投入することができたことである。これまでのイメージでは、ソ連側は手持ちの兵力を一切適切かき集めて応戦し、それに泥濘と冬將軍も味方して辛うじて独軍の阻止に成功した、ということになっている。ところが、

